

## 第13回ノーバディズ・パーフェクト・プログラム総括

植田 智<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

本学においてノーバディズ・パーフェクト・プログラム（以下、NPプログラムと略）を開催して、今年度で13回目となった。心理学科のみならず、本学の地域貢献活動として定着し、プログラム参加者とすずらんひろば高陽やぶんこ広場など、本学の他の子育て支援活動とのつながりも深まってきている。

安佐北区との共同開催も6年目となり、連携もさらにスムーズに行われるようになった。また、例年通り財団法人ひろしまこども夢財団よりこの活動の趣旨にご賛同いただきご後援をいただくことができた。

4年前から託児スタッフとしてお世話になっている海田子育て支援サークル「くすくす」との連携もとてもスムーズなものとなり、地域貢献のみならず、学生の実践教育の場としても非常に有意義なものとなっている。

### 2. NPプログラムについて

NPプログラムについての解説は2010年度の本紀要（植田，2011）を参照されたい。概略として、このプログラムはその名の通り「はじめから一人前の親などいない。皆まわりからの助けを得ながら親になっていく」との考えのもとに、カナダで作成された0歳から5歳の乳幼児を持つ母親向けの支援プログラムであり、毎週1回の計8回で構成される。事前面談をもとに設定された共通の悩みや不安などのテーマについて、ファシリテーターの支援のもと、参加者同士で不安の軽減や問題解決の糸口を見つけるとともに、関係づくりをめざすものである。

そのことを可能にするために重要となるのが、

完全クローズドの安心してくつろげる空間づくりと、そのためのファシリテーター、託児スタッフ、運営スタッフの3部署の連携である。本学では、毎回プログラム終了後に全スタッフによるミーティングを行うことで連携を密にしていることが、他にはないひとつの大きな特色となっている。

### 3. 実施概要

- (1) 主催 安佐北区・広島文教女子大学人間科学部心理学科・心理教育相談センター
- (2) 後援 財団法人ひろしまこども夢財団
- (3) 開催日 2019年10月9日～11月27日の毎週水曜日10：00～12：00まで、全8回
- (4) 場所 広島文教大学心理教育相談センター
- (5) 参加者 母親14名、託児15名(3カ月～3歳2カ月)
- (6) スタッフ（敬称略）

ファシリテーター 金子留里，濱田さつき（いずれもNPジャパン認定ファシリテーター）

託児スタッフ 海田子育て支援サークル「くすくす」（代表 森本伸子）メンバー

学生託児スタッフ 大学院1年生2名，初等教育学科4年生16名，計18名

運営スタッフ 植田智，小早川久美子，田麿亜希，平原明日香

### 4. 第13回NPプログラムの特徴

#### (1) 安佐北区との共催

安佐北区との共同開催は今年度で6回目となった。近年はキャンセル待ちになるほど多くの参加希望者があり、区との連携が密となり、多くの対象者に周知を図ることができると同時にアウトリーチもかけやすくなったことが大きいと思われる。

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

## (2) 心理学科「ソシオ学校」活動としてのNPプログラム

2010年度より、本プログラムは子育て支援という地域貢献と教育活動の2つが両輪となった「ソシオ学校活動」として位置づけられている。

学生たちのNPプログラムへの関与度を高めるため、募集チラシの作製や発送、参加者名簿の作成などの事務的業務を学生たちにも関わってもらっている。これにより、地域貢献活動についてのノウハウやそれにかかわる人々の思いを理解することを狙いとしている。しかし今回は、心理学科4年生の絶対数が減少したこともあり、心理学科学生の参加が得られなかったため、事務的業務は運営スタッフで行うこととなった。

一方で、初等教育学科からは託児希望の子どもの数以上の参加があり、託児そのものについては問題なく進めることができた。託児スタッフの学生については、NPプログラムの意義や自分たちの位置づけを明確にするために、事前講習会において託児方法のみならず、プログラムそのものについての研修も行っている。

プログラム実施中は、託児による子どもの発達やかかわり方の体験的理解はもとより、毎回終了後のミーティングにおいてファシリテーターからプログラムの概要を報告していただくことにより、母親や子育てに対する理解も深めている。

## (3) 託児スタッフの充実

今年度も託児学生スタッフが18名と、大変多くの学生が託児スタッフとして参加してくれた。また大人スタッフも毎回4～5名のご参加をいただいた。託児利用も一昨年度に続いて非常に多く、15名の託児となった。基本的には一人の子に対して一人の学生が担当し、それを大人スタッフがフォ

ローするという形での託児体制が取れたことは学生たちにとって有意義であり、利用者からも好評であった。ただ、今年度も期間途中で授業の都合で一日だけ初等教育学科の学生が全員抜ける事態となり、心理学科4年生が急きょ応援に入ったり、大人スタッフもその日だけ増員して下さったりすることで、しっかり対応できていた。しかし、この課題は今後も続くものと思われ、初等教育学科以外の学生スタッフの参加もしっかり呼びかける必要がある。

近年、比較的安定して多くの学生が参加してくれるようになったことは、大学でNPプログラムを実施することの意義を高めるものであり評価できる。また、「くすくす」の方々が、各回の反省文に対して詳細なコメントをくださったり、その日の目標を設定させてくださったりと、学生の託児体験をとっても充実したものにさせていただいていることに大変感謝している。

## 5. おわりに（謝辞）

今回も、安佐北区および財団法人ひろしまこども夢財団の皆様の形だけではない数多くのご支援、本学教職員の多大なるご協力、ファシリテーターや託児スタッフの皆様の労を厭わぬお働き、そして参加してくれた学生たちの誠実さと責任感に支えられて、大過なくプログラムを終了することができた。

ご関係の皆様方に、紙面を借りて深く感謝の意を表します。

## 引用文献

植田智 (2011). 第3回ノーバディズ・パーフェクト・プログラム総括 心理臨床研究, 1, 65-66.